
終演を終わらせる者

朝倉 純一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終演を終わらせる者

【Nコード】

N9694B

【作者名】

朝倉 純一

【あらすじ】

主人公、長谷春樹 ナガタニハルキ はある日謎の異常状態になった。病院で聞かされる真実、自分自身を恐れる春樹に迫る影、春樹が知る本当の真実とは？そして春樹が取る行動は！？

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションです。作品中に登場する人物、建物等は現実とは異なります。

プロローグ

昔、世界には様々な異様の力を持つ者が居た。

彼等はその力を使い世界に平穏をもたらした。

しかし、その絶大なる力を悪用する者も存在した。

世界に平穏が消え去り、力無き者は力ある者に滅ばされるしかなくなつた。

そんな時、4人の異様な力を持つ若者が現れた。彼等はその力を使い世界中に散らばる全ての異様な力を持つ者を集め管轄した。そして現在、異様な力を持つ者は発見しだい執行者と呼ばれる力を持つ者の中でもずば抜けて力のある者が保護又は始末する。そして、今、全異様能力者の頂点に君臨する四皇帝が執行者に指令を出した。

プロローグ（後書き）

今までとは書き方を変えて書いてみました。読み難い、情景が浮かばない、何を表現しているか分からないなど、アドバイスや感想をして頂ければ幸いです。

第1話：覚醒

〽1ヶ月前〽

「……ッ！あ、あつ、〽！、ぐあああああ！……！！……！！」

バタンツ……ドン！

「があああ……！くっつ……！あああああ……！！……！！」

ドンドン……！

「どうした……！ハル！大丈夫か……！」ドンドン……！！

「うッ！ああ！くっつ、あゝあああ……！！……！！」

バンツ……！ドン！ドン……！！

「は、ハル……！大丈夫か！クソ、扉をぶち破るぞ……！！」

「は、はい！」『せーの……！！』

バッキツ……！！……！！

………

………

（……ん？）

「……もう大丈夫ですよ。峠は越えました。」

「ほ、本当ですか！先生！じゃあ、部屋に入っても良いですか……！」

（……何だ？今日は朝っぱらから騒がしいな）

「いや、今日のところはご遠慮下さい。峠を越えたと言ってもまだまだ安心できる状態ではありません。」

「そ、そんな………」

「……酷い言い方をしますが、今は彼のことを信じ待って下さい。お願いします。」

（……何だ？人の部屋の前でえらく深刻な話をしてないか？ん？あれ

「体が…えっ？」

「…あつ、あ？」

（えっ？声が上手く出ない？それに体がぴくつともしない？…うっ！眩しい！）

ギギッ

「ん？先生、今何か音がしませんでしたか？」

「え？まさか！？」

ガラガラ！！

「！！！」

（何だ何だ！誰が入って来たぞ！…クソッ！眩しくて前が見えないぞ。）「う、ああ、あ…」

「！春樹さん！？意識が戻りましたか！」

「ハル！！大丈夫か！」

（うわ！？何だ！親父か？…あつ、ちよつとずつ見えてきた。）

「ハル！！！！」

「鷹八さん！落ち着いて下さい。病院ですよ！」

（病院？…ここは、オレの部屋じゃない…病室か？）

「うつつ、すみません…」

「いえ。…春樹さん大丈夫ですか？ここがどこか分かりますか？」

「…びよ…いん？」

（くそ、何なんだよ！動けない上に声も上手く出せやしない！目は…少しぼやけるけどさっきよりましか…。）

「はい、そうです。じゃあ、何でここに居るか分かりますか？」

（…？確か昨日は眠かったから早めに寝たよな？…何でここに居るかって？）

「……わ、から…い」

「…意識はちゃんと戻ってますね。…あとは検査をしないと分かりませんが、…もう大丈夫でしょう。拘束具を外して下さい。」

『はい。』

（ん？何だこのゴツい奴らは？…拘束具？…な！？）

「が！な、んだ…これ…」

「…詳しくは後ほど、検査が終わってからにしましょう。」

（検査つて、何したんだよオレは。何で全身拘束具何かで固定されてんだよ！？）

「はい、これで全ての検査は終了です。お疲れ様です。」

「…何だったんですか？何でオレが検査何て受けないといけなかったんですか？」

「…その質問の前に少し私から質問をしても良いですか？」

（…）

「…良いですよ。」

「ありがとうございます。それでは早速質問します。まず、春樹さんは何で病院に連れてこられているか分かりますか？」

「…は？それが分からないから質問したんでしょう。」

「春樹さん。質問に答えて下さい。」

（…何だよコイツ。昨日は普通に寝たよな？じゃあ寝てる間に連れてこられているのか…。何でだ？）

「……分かりません。」

「はい。それでは次の質問です。」

「理由は教えてくれないんですかね？何で拘束されて」

「春樹さん。まずは私の質問に全て答えて下さい。良いですか？」

「…オーケー。分かりました。」

「はい。それでは質問です。今日が何月何日か分かりますか？」

（今日？昨日が15日だったから16日だろ）

「…5月16日」

「はい。次の質問です。…コレを握って下さい。」

「空き缶？…握りましたよ。次は？」

（握り潰せつても言うのか？握った感じアルミ缶みたいだが）
「では、その缶を握り潰せますか？無理はしなくて結構です。」

バギツ!!

「…次はスチール缶でも潰しますか？」

（こんなアルミ缶ぐらい簡単に潰せるだろ…）

「いえ、結構です。…最後に1つその缶の材質は分かりますか？」

「材質？アルミ缶でしょ？アルミニウム？」

「はい。分かりました。…では、まず初めの質問ですが春樹さん、あなたは先日自宅の自分の部屋で異常な行動をとり、ご家族の方々が押さえつけ病院まで連れて来られました。」

「…は？異常行動？オレが？はあ？」

「詳しく言うと、病院に連れて来られた時、あなたは45度の熱を出していました。そして、大人の男5人がかりでさえあなたを押さえられなくなっていました。」

「はあ？」

（何言つてんだコイツ？45度？そんな体温で人間が生きれるのか？…つか5人がかりつてゴリラでも相手にしてんのか？）

「…混乱するのは分かります。私も初めはどうすれば良いか分かりませんでした。」

「いや…、ぶっちゃけ全然意味分かんないですけど…。人違いじゃないんですか？」

「人違いではありません。あなたが起きた時あなたが見た光景が真実です。…全身に拘束具を付けベッドに固定し、警察の方からも応援を要請しました。」

（警察？…ベッドの近くに居たえらくガタイの良い奴らか？…オレを押さえるために？）

「…いくら何でもそこまでは…。…ドッキリですか？」

（さすがに嘘っぽいぞ。全然記憶にないし。）

「全部真実ですよ。…では、ちょっと廊下に出ましようか。」

（…な、何だよこれ…）

「何ですかこれ？マジでゴリラが暴れたんですか？」

「いえ、…アナタが連れて来られ、ちょうどこの時が一番激しくなつたんです。ここの病院に居る男では10人がかりでも無理だと思いましたよ。」

（…壁が、床がボロボロだ…。ちょうど拳くらいの大きさだな。そこから中穴だらけだ。）

「高熱にうなされ、叫びながら痛みに耐えていました。そして、止まりがきかない痛みを紛らわすのに暴れたんでしょう。」

「…そんな…嘘、だろ。こんな…」

（何だよ！どうなつてんだよ！！これをオレが？嘘だろ？）

「…病室に戻りましょう。さっきの続きを話します。」

「……はい。」

「…では、2目の質問ですがアナタは今日5月16日と言いましたね。」

「…違うんですね。」

（…45度もあつたみたいだしな…10日ぐらい寝てたのかな…）

「その前に一つ確認をします。アナタが病院に運ばれたのは何日ですか？」

「…え？…15日でしょ？」

「…春樹さん、アナタが運ばれたのは14日ですよ。アナタは1日眠っていただけです。つまり今日は16日です。」

「…ん？オレの勘違い、ですか？」

「たぶんそうでしょう。…まあただの勘違いでしょうから問題ありません。…次の質問ですが、空き缶を握ってもらいましたね。」

「…スチール缶だったんですか？」

（簡単に潰せたぞ…。マジであの壁はオレが…）

「簡単に言えばスチール缶よりも十数倍硬いです。医療に使う特殊な金属で出来ているため、まさか潰せるとは思いませんでした。」

「…そんなもん握らせんなよ！…この机ぐらい簡単に握り潰せるかな？」ミシッ

「病院の備品を壊さないで下さいね。…安心して下さい、検査の結果は特に問題ありませんでした。入院の必要も特にありません。」

「…え？大丈夫ですか？」

「はい。もし春樹さんが入院をご所望なら止めませんが…。」

「…入院はイヤだな、だけどこんな状態のオレを野放しにして良いのか？」

「…でも本当に良いんですか？また暴れたりしないんですか？」

「…医学において100%の安心はありません。絶対に1%の危険性は存在します。…ですから、春樹さんにはしばらく通院してもらうことになりましたが良いですか？」

「……」

「…はい。分かりました。」

「では、まずは明日来て下さい。それから状況にも異なりますがしばらくは3日おきにに来てもらうことになります。」

「はい。」

「…それと、一つ約束してもらうことがあります。」

「約束、ですか？」

「はい。内容は春樹さんの身に起きた現象を表沙汰にしないこと。つまり知り合いや知人、友人や肉親にさえ内密にすることです。…

親御さんの方にはもう話して了承もいただいています。」

「…分かりました。」

「はい。では、この書類にサインと拇印をして下さい。…書類の内容はこの件についての情報を一切口外しないこと。それを守って下されば治療費など全ての経費等はこちらで持ちます。」

「…え、何でだよ。そこまですることなのか？オレが病院の修理費を支払うなら分かるが病院が出す？治療費まで？何でだ？」

「…これは脅しではありません、警告です。もし書類にサインがもらえない場合は全ての修理費、治療費等はそちらに支払ってもらい

ます。」

（…オヤジも承諾するわけだな…。つーか警告じゃなくて脅しだろ！）

「…分かりました。サインします。…、朱肉はどこに？」

「これをどうぞ。…はい、確かに。確認しました。では、もう身支度が終わり次第お帰りになって構いません。手続き等はこちらでやりますから。明日は忘れないように来て下さい、ではお大事に。」
ガラガラ〜バタンツ

「ふう〜。」

（やっと終わったか。…何が何だか…。…本当にオレがやったのか…？）

ガラガラ

「ハル、大丈夫か？」

「ん？ああ、大丈夫。先生も特に問題はないってさ」

「…そうか。ならそろそろ帰るか。」

「うん。…心配かけてゴメン。」

「気にするな、子供は親に心配をかけるもん何だよ！」

「…ありがとう」

第2話：執行者

入院より1ヶ月

「…あ、おはようございます。」

「おはようさん、寝ぼすけ！」

（あの日から今日で1ヶ月か…。初めの頃はかなり気を使われたが今では以前のままだな。漠さんも相変わらずだし。）

《漠さんは、昔オヤジが拾ってきた家の居候だ。家出少年か何かみたいだったが今じゃ家族の一員として生活している。詳しい事情とか本当の家族のこととかは全然分からないけど特に違和感もなく生活している》

「おはよう。…今日も学校帰り病院行くから少し遅くなるよ。」

「ああ、…もう1ヶ月だろ？いつまで通院しないといけないんだ？」

「…分からない。…オレはもう大丈夫だと思うけど、佐畑先生がまだ通院しろって言うだよ。」

（実際もう大丈夫だと思うけど…検査の結果がな…。）

「…確かに初めの頃は落ち着かない感じもあって心配しましたが、今は特に問題ないと思いますね。」

（…まあ初めは信じれなかったしな。でも今は…）

「まあ書類にサインしたから今更約束破るわけにもいかないよ、しばらくは我慢するよ。」

「…お前がそう言うなら何も言わんが、困ったこと何かがあればすぐ言えよ。」

「分かってるよ。」

「……。」

「ん？漠さんどうかした？」「え？いや、もうすぐ学校に行く時間かなと…」

「え？あつ、本当だ。じゃオレ行くから。」

「おう、行つてらっしゃい！」

「行つてらっしゃい。」

「行つて来ます。」

「よう春樹！聞いたか！」

（学校着くなり一体何だよ）

「…何を聞いたんだよ。主語を言えよ。」

「ふふん、その様子じゃまだ知らないみたいだな～！聞いて驚け！
何とオレ達のクラスに転校生がやって来るぞ！」

（転校生？この時期にか？まあどうでも良いけど）

「そうか。…お前が喜ぶということは女子か。まあ男としてクラスの女比率が上がるのは喜ばしいことだ。」

「いや、それがまだ男か女が分からんのだ。探りを入れたが全く情報が掴めん！ホームルームまで謎つてことだ。」

（へえー、アキが探りを入れて何にも掴めんかったのか。）

「ふ、お前も落ちたな。しかし、少し楽しみも出てきたぞ。」

「ふっふっふ、楽しみ？それは違うな。」

（お、この言い方は。）

「さあーゲームの時間だ！運命のカードはどっちだ！？」

（来たか、男か女かどっちかってことだな。負ければ勝者の言うことを一つ実行する！つまらん学校生活に刺激を与えるアキのデスマツチだ。）

「へへ、来たか。デスマツチ！最近やってなかったからな。久々だな～！」

「くくく、前回はお前の勝ち。お前の命令、英語のズラツチヨが力ツラかどうか調べる！という事だった。…くっくっく！オレがここに居るのも奇跡だよな…」

（英語の先生はカツラ疑惑があり、あだ名ズラツチヨ。しかし、誰

一人事実を知る者が居なかった…。そこでオレはアキに頼むことにした…。結果は…かぶり物だった。そしてその真実を解き明かしたアキはその行動力を買われ見事説教部屋に連行されたのだ。)

「ふっ、このゲームは勝者こそ全て！そう教えてくれたのは、アキ！お前だろ？」

(…このゲームを初めて約1年…初めの十戦はオレの全敗…。最初のころはアキもジューズを買って来いなどパシリがほとんどだったがオレの連敗が進むに連れて内容もヒートアップ！十戦目の命令は学校から40km離れた弁当屋まで自転車で行き買いに来てという事だった…。そしてオレは悟った！これはゲームじゃない、生死を賭けたデスマッチ！負けは許されない！…そして現在、13勝16敗まで追い上げている。)

「…さあ、時間だ！前回の勝者が先に選ぶ権利がある！春樹！答えは…！」

「…男だ…！」

「ふっ、…ならオレは女だな。初めは女と言いながら変えるとは！この勝負もらったな！はっはっは！」

「その理屈は良く分かんが…、オレは負ける気など微塵もないぜ！」

「良く言った！それでこそ我がライバルだ！…そこで今回の勝者は30戦目を記念して2つ命令を出せることとしないか？」

「ほおー、そんなに自分を陥れたいのか？感心、感心。」

「ふ、言ってる！オレは自分を窮地に追いやることで普段の4割増で強くなれるのだ！このところのお前の追い上げが気になってきたことだしな！久々に本気になってやるぜ！」

(…2択の選択でどう本気になるんだ？)

「さあー！春樹！返答は…！」

「…もちろんOKさ！アキ！覚悟するんだな！学校にはまだ7つも不思議があるんだぞ！」

「くっくくく！そいつぁ面白そうだ。だが安心しろオレも鬼じゃな

い、命までは取らんさ……くつくつく……それじゃホームルームの時
また会おう」

ダッ！

（おいおい、ホームルームまでどこ行くんだよ？……ま、いつか。）

……

キンコンカー……

「……やっとか」

（さて、やっとホームルームだ。じらさねえーで早く来てくんねー
かな？……アキのヤツ手合わせて何やってんだ？……まさか神頼みか！
お前の4割増の本気はそれか！！？）

ガラガラ

「みんな席に付け！ホームルーム始めるぞ！」

（ん？転校生はどうした？）

「先生！転校生はどうしたんですか！？」

「晶、慌てるな。……あゝまあ良いか、みんな知っているみたいだから
先に転校生の紹介をしよう。木岐君入ってくれ。」

（お？……男？だ！！！！シャッ！！！！勝ちだ！！！！……）

「……」

「……ああゝ木岐君、自己紹介してくれるかな？」

「……木岐政安です。」

「……終わりか？もう少し何かはないのか？」

「……特にありません。私の席は？」

（……何だよコイツ、みんな少し引いてるぞ。アキは……死んだか……。）

「ああ、あそこだ……長谷の隣だ。」

「え……？ああ、ここだぜ。」

（そついや隣空いてたな……だが、何か気まずいな）

「……よう、長谷春樹だ。よろしく。」

「……」

（な、何だ？つーか返事ぐらいしろよ。）

「……話がある、放課後屋上に来い。」

「なっ！？」

（いきなり呼び出しかよ、何なんだよコイツは……どうするか……何て答えれば良いんだ？）

「……１ヶ月前の事に付いて聞きたいことがあるだけだ。」

「ッ！」

ギイギイ、ボタン！

（……屋上上がるの初めてだな、……アイツどこ居るんだ？……居た。）

「……さあきてやったぞ。オレに用があるんだろ？」

「……長谷春樹、貴様はすでに能力に目覚めている。よって執行者の名の下に連行する。」

「……は？」

（な、何だつて？執行者？）

「執行者とは能力を持つ者を捕らえるための者だ。……何も聞かされてないみたいだな……少し説明してやろう。」

「説明？何をだよ。」

「それを今から説明するんだ。」

（それもそうか……。……能力か……）

「……心当たりがあるみたいだな。」

「……は？」

「普通こう言う話をされたら大人しく聞くはずなかるう。少しは能力に付いて理解しているみたいだな。」

「……オレって優しいからな、つまらん話も無下にはしないんだ。」

「……。」

「なんだよ。」

「……順を追って説明しよう。まず貴様は１ヶ月前、病院に搬送され

たな、その時のあれが能力の覚醒だ。…貴様が行っている病院の担当医は佐畑だろう？アイツはオレ達の息がかかった者だ。そしてアイツの報告で貴様がすでにある程度能力に目覚めていることも分かっている。執行者は能力者の保護のためにいる。…詳しいことは最古長に聞くんだ。」

「最古長？」

「我々能力者を統べる者だ。我々能力者は異業の者だ、使い方を間違えれば世界を混沌に変えるだけの力を持っているのだ。それを管理し正しく導く者、それが最古長だ。…オレの話はここまでだ、保護の対象者は望むのであれば2日間の猶予を与えられる。…その間に身の回りの整理をするのだ。貴様の身支度が終わったら連絡しろ、すぐにオレ達の居場所に行く。」

(……)

「…最後に一つ忠告しておこう。変な気は起こすな、保護を拒否した場合は危険人物として処理されることになっているオレも無闇に殺生はしたくない。」

(…)

「…くれぐれも忘れるな。」

ギィギィイ、バタン

「……ふうー、疲れたな。…とりあえず帰るか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9694b/>

終演を終わらせる者

2010年12月29日14時30分発行